

〔第19回日本家族看護学会学術集会〕

事例検討

東京大学大学院医学系研究科

山本 則子

日本家族看護学会第19回学術集会では、学会初の試みとして、2題の事例検討を行った。家族看護の学術的知見を蓄積する一方法としての事例研究論文を生み出す1ステップに位置づけたいという意図からであった。初の試みであり試行の意味合いが強く、学びとともに反省点もあった。

実施にあたっては、いくつか注意をした。まず、事例の具体的状況のやりとりを含む可能性があるため、守秘義務を徹底するようにした。患者家族の権利擁護と事例提供者・参加者が安心してディスカッションを行えるようにという狙いから、事前申込制で当日の参加は受け付けないこととし、定員に達したところで募集を打ち切った。事前に守秘義務に関する同意書を提出してもらった。また、検討の結果を実践に活かすことを前提としたため、参加者は援助者の立場であることを事前に確認した。申込者多数の場合は抽選とする予定であったが、これは同じ施設からの参加者を制限してさまざまな施設・立場の方に参加してもらえるようにする意図があった。所属、現職、資格のほかに、領域ごとの経験年数を確認した。

検討に用いた事例は、1「在宅看取り事例における訪問看護師の家族支援」(セントケア訪問看護ステーションあい吉井朋代さんの報告)、2「未成年のCPA(心肺停止)患者の脳死臓器移植に関する両親への意思決定支援」(兵庫医科大学病院 久保田千景さんの報告)という2事例であり、1は柳原清子先生、2は上別府圭子先生をスーパーバイザーに依頼した。私はコーディネーターとして両者に出席した。学術集会1日目の13:30~14:30と、14:30~15:30に開催した。

当日、事例検討1の参加者は19名(申込は21名)であった。在宅看取り事例に対して訪問看護師が実践した内容について、渡辺式看護アセスメントシートを用いて支援過程を検討した。実践内容に関するスーパーバイザーの分析と解説が中心となり、参加

者が考察を加えていった。

事例検討2の参加者は20名(申込は21名)であり、家族支援CNSや看護師以外の援助職の参加もあった。定型化されたアセスメントシートは用いず支援の過程を振り返り、検討を行った。事例2ではスーパーバイザーが発表者に質問する形で主に進行し、看護師の実践内容に関する解釈が中心となって、参加者が考察を加えていった。どちらも活発な発言があり、実り多い時間となった。

初めて実施した印象をまとめると以下のようになる。

- 1) 状況を理解するだけでもかなりの時間が必要となり、時間が全体に不足して、これからもっと話し合いたいのに、というところで終了してしまった印象がある。2時間程度の余裕のある時間枠を設定する必要があるように思われた。
- 2) 従来の意味での、事例検討そのものを目的とした会というありかたを踏襲した形にどうしてなってしまう、研究論文執筆の前段階としての事例検討という位置づけ方が難しかったように思う。検討の手続きやステップを、もう少し考えてから臨むとよかったのかもしれない。
- 3) 事例研究論文のあり方にも多様性があるように思われ、学会での事例検討をどのように進めるべきかも、論文の書き方により違いが出るように推測された。それは、今回事例検討を担当した山本、スーパーバイザーをされた上別府先生、柳原先生の三者の間の違いとしても現れているように思われた。多様な研究のあり方を家族看護学において最大限活用できるように、検討を進める必要があると感じた。

今回は初の試みとして事例検討を実施し、以上のような学びを得た。今後しばらく、論文作成の1ステップとしての事例検討のあり方について、試行と振り返りを重ねてゆくと良いと思った。